能の歴史

私たちが学習した、「能」の歴史について紹介します。

能の源流をたどると、遠く奈良時代までさかのぼります。

当時大陸から渡ってきた芸能の一つ「散楽（さんがく）」という民間芸能がありました。器楽（きがく）、歌謡舞（かようまい）、物真似（ものまね）、曲芸奇術（きょくげいきじゅつ）

などバラエティーに富んだその芸は、「散楽戸（さんがくこ）」として官制上（かんせいじょう）の保護を受けて演じられていました。平安時代

になって、これが廃（はい）されると、その役者たちは、各地に分散して集団をつくり、多くは大きな寺社（じしゃ）の保護を受けて

祭礼（さいれい）などで芸を演じたり、あるいは各地巡演（かくちじゅんえん）したりするなどしてその芸を続けました。

この頃、「散楽」は日本風に「猿楽（さるがく）／申楽（さるがく）」と呼ばれるようになり、時代と共に単なる、物真似から様々な世相をとらえて風刺する笑

いの台詞劇として発達、後の[狂言]へと発展していきます。一方、農村の民俗（みんぞく）から発展した[田楽]大寺野密教的行法（おおてらのみっきょうてきぎょうほう）から生ま

れた[呪師的（じゅしてき）]などの芸もさかんに行われるようになり、互いに交流影響しあっていました。鎌倉中期頃には猿楽の集団も寺社公

認のもと「座」の体制を組み当時流行していた[今様][白拍子]など゛の歌舞的要素を取り入れた、一種を作り上げていきます。

そして、それまでの舞を中心とした猿楽に、物語の要素が入るようになり、今の能の原型が出来上がりました。

喜多流の歴史

流紋（喜多霞）

次に私たちが学習した喜多流について紹介します。

喜多流の流祖、喜多（旧名は北）七太夫長能（しちだゆうちょうのう）（1586～1653）は、堺の目医者の子で、

七歳の時、秀吉の前で舞った「羽衣」で名を上げ「七つ太夫」と呼ばれた芸の天才でした。この名が後に、そのまま

七太夫となり、喜多流の家元の呼称となりました。

その後、豊臣秀吉の近習（きんじゅ）となり、六平太（ロッペイタ）と呼ばれていました。このロッペイタはポルトガル語に由来するとも謂（い）われ、秀

吉の近くに待っていたことから名付たと謂われています。

後にはこの六平太を家元継承前の名として用いました。

秀吉の応援もあって金春禅曲の娘をめとって、その流れをくむことになりますが、その時代には

四座の他にも渋谷流や下間流といった様々な能役者の流れがあり、七太夫は卓越した芸術的

感覚でそれらを取り入れ、一流を創り出しました。その秀でた力量を認められ、一時は金剛太夫として

また宝生流の後見役を勤めるなどの活躍もありました。

大阪夏の陣には豊臣には豊臣方の一員として戦い、落城後は身を隠していましたが、徳川家康が「七太夫はどうしている？あの能

がもう一度見たい。」と言ったのがきっかけとなり、黒田藩主たちが奔走して七太夫を探し出し、江戸へ出仕させました。その間に

徳川将軍は二代目の秀忠に替わっていました。秀忠は七太夫に徳川家に仕えるように勧めましたが、七太夫は武士は二君に仕え

ずといって固辞しました。秀忠は今後は能役者として仕えるように勧め、北姓を喜多と改め家紋もその時の引き出物の嶋台を模っ

て喜多霞の家紋（喜多流の紋所）としました。太夫としての待遇を受け、従来の四座の別に一流の創設を認められ、七太夫流ある

いは喜多流と呼ばれるようになりました。